

館

小川未明
文学館

報

vol.10



2016年
5月31日



高円寺の部屋にて（撮影 富樫啓）



『未明の部屋』

小川未明文学館開館10周年を記念して、未明が昭和27年（1952）70歳のとき移り住んだ高円寺の書斎部屋を再現しました。未明が愛用した文机やテーブル、脇息、座布団などを置き、本棚には未明作品を並べています。小川未明文学館を訪れた際には、この部屋で未明の執筆の雰囲気をお楽しみください。

小川未明文学館

新潟県上越市本城町8-30（高田図書館内）

TEL 025-1523-1108
TEL 025-1523-1108
FAX 025-1523-1108
TEL 025-1523-1108

小川未明文学館 館報 第10号

2016年5月31日発行(年刊)

目次

【寄稿】

加藤登紀子

「夜空の蒼穹を想う」

3

【報告】

文学館1年の記録(平成27年度)

6

小川未明文学館特別展 開館10周年記念

「移動する未明―高田・早稲田・高円寺―」

8

新展示場 未明の部屋 紹介

10

文学館講座

11

【小川未明文学賞】

13

【ボランティアネットワークだより】

「のばら vol.12」

14

【文学館からのお知らせ】

16

歌手・女優

加藤 登紀子



夜空の蒼穹を想う

私が「小川未明童話選集」の朗読のレコーディングをしたのは2003年の夏でした。私の夫が他界してちょうど1年。それだけに、小川未明の透明な言葉が私の心に深く響くので

した。

「赤い蠟燭と人魚」や「金の輪」など、馴染みの深い作品ではありましたが、言葉の息づかいや、間の取り方や、語り方の絶妙さが、声に出して朗読することで、しんと胸に届いてくるのが感じられました。

未明という名前には、薄暮に対比した明けやらぬ朝の薄明という意味が込められているようですが、私には、やはり夜空の印象があります。

私の夫が最後の闘病をしていた頃、ちよとなくなる1ヶ月前の満月の夜に、夫の開いた農場のある里山の小さな頂きに、友人と登った事がありました。あまりにも満月が明るくて、いつもは足元が真っ暗な山道を、月明かりだけで登ったのです。

山頂には轟々と風が吹き、青い光を放った月が真っ暗な空に孤光を放っているのを見て、それがもう直ぐ死に向かおうとする夫の姿に見えて、言葉もなく魅入ってしまったのでした。

この夜の月を、夫の姿に重ねて歌ったのが「青い月のバラード」。夫の他界した翌年にはこのタイトルで2人の思い出を綴った本も出しました。

なんだか小川未明さんの童話のシーンのようで、その夜の月が異様に明るかったことが、あの「金の輪」と同じ意味を持つようにも思えるのです。

この農場のある南房総の鴨川に1200年以上の歴史を持つ



小川未明文学館を訪れた加藤登紀子さん

「大山不動尊」というお寺があります。海からは車で30分もかかる山の上にあるのですが、このお寺に灯る蝋燭は、太平洋を航行する船には灯台の役割を果たしたものだ、ということなんです。「赤い蝋燭と人魚」を読むと、私はどうしてもこのお寺を思い浮かべます。

小川未明さんの童話は、私の中で、どうしても夫との思い出に繋がってしまうのです。

小さな国と大きな国の国境の青年と老人の話を描いた「野薔薇」や、「殿様の茶碗」なども夫が好きそうなお話で、心の中でつい彼と話し込んでしまいます。

朗読のCDを聞き直してみると、静かな時間を夫と過ごしているようで、懐かしさや、嬉しさでいっぱいになります。

それから12年経って去年、「コドモノクニ」の番組で、小川未明さんのナビゲーターに選んでいただいて、上越市高田を訪ね歩くことになりました。

たった1日でしたけれど、直ぐそこに未明さんを感じる事が出来、童話の世界とはまた別の、小さかった頃の未明さんや、新しいことや時代への抵抗に挑んだ青春時代などの、生々しい息づかいが伝わってきて、嬉しかったです。

童話の中の自由なキラキラとした心象とは違って、写真の中の未明さんは、いつも立派なドンと落ち着いた人なのが不思議でしたが、坪田譲治さんによれば、未明さんはいそがしい短

い人だったそうで、食事をしても、お酒を飲んでもサッサと済ませてしまつて、長つたらしいのが嫌いだったそうですね。

1遍ずつが短い童話が好きだったのも、きつと気が短かつたせいだ、と言う坪田さんの説を知つてから、この未明さんの風貌からも、軽妙さや可笑しみを感じるようになりました。

生涯の最後に残された最愛の言葉が、

「雲の如く 高く くものごとく かがやき 雲のごとく とらわれず」

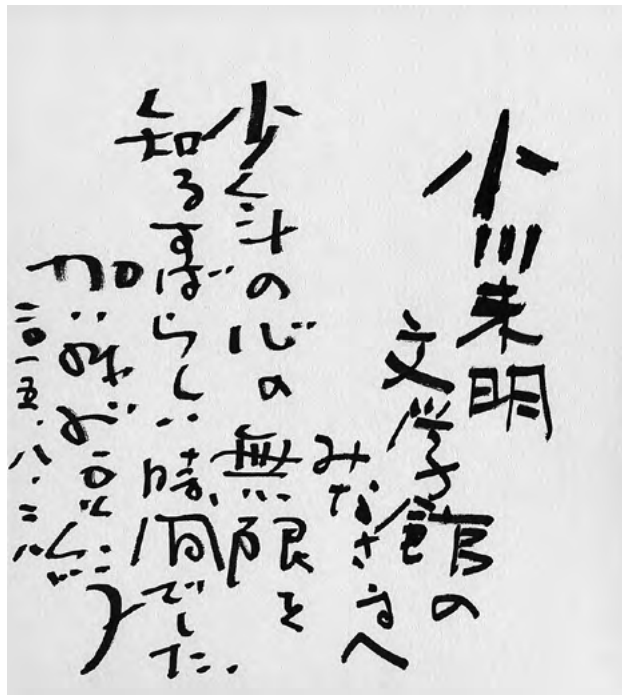
だったそうで、サラサラとテンポの良い、簡潔な言葉で語る、小川未明の作風の極意がここにある、と思いました。

残された童話の作品数が膨大なのに、童謡になつていものが少ないのが、残念なのですが、きつとどこかに埋もれているかもしれないですね。

番組の時に会いた上越教育大学教授、小笠裕二さんの編纂された「新選小川未明」という著作集を読んでいると、歌になりそうなものがいっぱいあります。

大人の童話を集めた秀作童話50「ヒトリボッチノ少年」という本の中の「海の彼方」という童話などは、そのまま歌にはならないけれど、曲が聴こえて来そうなストーリーですね。音楽が好きだった未明さんのロマンから、何か歌を作つてみたいと、しきりに思えます。

小川未明作品はまさにイメージの宝庫、まだまだ丁寧に読み進んでいきたいと思ひます。



加藤登紀子さん色紙

◆文学館1年の記録◆

朗読研修会

6月26日・7月10日・7月24日

参加者 28名

△橋由貴さん(朗読療法士・ヴォイスアーティスト)を講師に、朗読研修会を開催しました。初めに、基本的な声の作り方や表現力の磨き方、基礎練習や発声練習方法と大切さを学びました。その後、未明童話「金の輪」「野ばら」を題材に実践的な朗読を行い、個々に講師から指導を受けました。



童話創作講座

7月26日・8月30日・9月6日

参加者 12名

△小川未明文学賞選考委員の佐々木赫子さん(児童文学作家)を講師に、短編童話の書き方について学びました。まず、テーマや構成などについて基本的な講義を受けた後、受講者が創作した童話の講評を受けました。つぎに、受講者同士でお互いの作品について意見交換しあい、今後の創作の参考にしました。受講者の皆さんの作品は、「童話創作講座受講者作品集」として、文学館の図書コーナーや図書館で読むことができます。



開館10周年特別展

「移動する未明―高田・早稲田・高円寺―」

10月3日～11月8日

来場者 2940名

△未明の人生を「空間」(住まい)という切り口から高田時代・早稲田時代・高円寺時代の3つに分け、それぞれの時代の作品や仲間との関わりについて紹介しました。

会期中の10月18日には未明ボランティアネットワークの協力で特別展おはなし会を開催し、15名の方から参加いただきました。

また、開館10周年を記念して、未明が晩年を過ごした高円寺の書斎を再現し、実際に使われていた身の回り品を展示して作品執筆時の雰囲気を再現しました。

(詳しくは【報告】特別展の8・9頁をご覧ください。)



文学館講座

11月7日・11月21日・12月6日

参加者 67名

△未明にちなんだ3回の講座を開催しました。講師は、第1回千葉俊二さん(早稲田大学教授)「憧憬の作家 小川未明」、第2回 成實朋子さん(大阪教育大学准教授)「近代中国における小川未明童話」、第3回 小笠裕二さん(上越教育大学教授)「小川未明の詩碑〈雲の如く〉」でした。(詳しくは【報告】文学館講座の11・12頁、および『小川未明文学館 紀要』創刊号(平成28年3月発行)をご覧ください。)





小川未明フォーラム(上越文化会館)

「今よみがえる未明の愛」

～未明の功績を今の世に問う～

11月8日

参加者 128名

松本猛さん(美術・絵本評論家、ちひろ美術館常任顧問)による「いわさきちひろと小川未明」と題した基調講演のほか、宮川健郎さん(武蔵野大学教授)のコーディネートにより、小埜裕二さん(上越教育大学教授)、千葉俊二さん(早稲田大学教授)、杉みき子さん(児童文学作家)、堀越千秋さん(画家・陶芸家)、松本猛さんが、未明の功績とその神髄についてパネルディスカッションを行いました。(詳しくは「小川未明文学館 紀要」創刊号(平成28年3月発行)をご覧ください。)



第24回 小川未明文学賞贈呈式

3月28日

「小川未明の文学精神を次の世代に継承し、子どもたちの心に夢と希望を育む」ことを目的に平成4年から募集している第24回小川未明文学賞の贈呈式を、東京都内の学研ビルで開催しました。大賞はこうだゆうこさんの「四年ザシキワラシ組」、優秀賞は中村おとぎさんの「野生の力がのりうつる」、江森葉子さんの「停車場通りのものがたりーみんな、生きた。昭和10年オムニバス」、水都さんの「夏休みの音色」でした。(小川未明文学賞の13頁で、大賞のこうだゆうさんの「受賞のひとつこと」を紹介しています。)



文学館おはなし会

毎月第2・第4日曜日

未明童話の魅力を伝えるため、未明ボランティアネットワークの協力で、月2回のおはなし会を開催しました。平成27年度は24回で330名の皆さんにご参加いただきました。ボランティアの皆さんは、毎回すてきなポスターを作成し、文学館入口に掲示しています。そちらにもご注目ください。



出張おはなし会

未明作品に出会う機会をより多くの方に提供するため、未明ボランティアネットワークの協力で、出張おはなし会を開催しました。学校や福祉施設など、27年度は30カ所(1294名)を訪問しました。(詳しくは「ボランティアネットワークだより」の14頁をご覧ください。)

平成27年度特別展

開館10周年記念

「移動する未明」

―高田・早稲田・高円寺―

〈会期〉10月3日～11月8日
 〈会場〉小川未明文学館

小川未明は上越市の高田に生まれ、高校時代までの多感な青春時代を当地で過ごしました。その後、早稲田大学へと進学し、そこで出会った人々―師坪内逍遙や小泉八雲、友人相馬御風のほか、片上伸、正宗白鳥、坪田譲治や浜田広介等の同世代の友人・知人や先輩・後輩との交流が未明文学に大きな影響を与えました。そして、終の棲家として移り住んだ高円寺で、未明は童話創作に専念し文化功労者として表彰されたのち、その生涯を終えます。

未明の人生は、「空間」（住まい）を移動することにより、その文学も、未明を取り巻く仲間たちも大きく変わりました。そのことから、未明の人生を「空間」（住まい）から高田・早稲田・高円寺の3つの時期に分け、それぞれの時期の「文学」、「仲間」の移り変わりを紹介しました。

第一章 北国に生まれて―高田―

未明は明治15年（1882）4月、高田の五分一（現上越市幸町）の衰微した足軽長屋に生まれました。町から少しはずれた所で、「黒い杉の森が沢山あって、寺の多い処」と未明は書いています。家から小学校までは、職人町などの町中を通り抜けて2キロ弱でした。高等小学校、中学校と進み、15歳の頃、一家は父澄晴が創設した春日山神社に移り住みます。未明はそれまでも、母に言われてたびたび神社建築中の様子を見に行っていました。春日山から五分一までは5キロ、中学までは7キロほどあり、その往復が未明に北国越後の自然を深く教えこみま



未明と母チヨ

未明は小学校へ入る前から、私塾で漢学や数学を習っており、小学校入学後は、学校が退けると剣術を習い、そのあと私塾で論語や日本外史を勉強しました。中学では佐久間象山の高弟である北澤乾堂にも興味を持ちました。しかし、数学が苦手で落第を繰り返し、教師の勧めもあつて大学に行くことを決意、4年生で中退することになりました。

ひとりっ子で孤独な心を抱えていた未明でしたが、中学では生涯の友となる相馬御風や、文芸部で一緒に活動する同じ趣味の仲間との出会いがありました。



新潟県立高田中学校（現・高田高校）

第二章 都会に生きる―早稲田―

明治34年（1901）4月6日、夕暮れの上野駅に降り立った未明は、翌日から半込区原町に下宿。東京専門学校（翌年早稲田大学と改称）英文哲学科（のちに英文科に転科）に入学します。

その頃の早稲田は、まだ鶴巻町などもなく、大学の周辺は一面の青田でした。住まいは学校の寄宿舎ではなく下宿でしたが、その家の人たちとなじむのがいやで、早いところは3日、一週間くらいで引越すこともありました。

早稲田大学で未明は、その後の人生に大いに影響を受ける師たち…坪内逍遙、小泉八雲、島村抱月らに出会います。



高田中学校時代（未明 上段右端）

明治37年(1904)に「漂浪児」で文壇にデビューした未明は、翌年発表した「叢に雲(あられにみぞれ)」「新小説」で作家としての地位を確立します。明治39年には休刊していた「早稲田文学」が復刊し、その第二次「早稲田文学」の創刊号にも小説「乞食」が掲載されました。その後も60以上の小説や感想などを同誌に発表し、最も多く寄稿した作家の一人となりました。明治40年に第一短編集「愁人」、第二短編集「緑髪」を次々と発表し、その後も生活の困窮・二児の喪失に鞭打たれながらも、小説や童話を創作し続けました。

かんしゃく持ちで人付き合いの苦手な未明でしたが、大学生時代は親友といえ



坪内逍遙主催の読書研究会(未明 後列右から5番目)

る友人もでき、一緒に散歩したり町歩き回ったりするようになりました。また同期の人々とは、明治38年の卒業年から「三八会」と名付けた会合を開き、その後も長く付き合うこととなります。文壇では、第二次「早稲田文学」の編集に携わっていた人、同誌に寄稿していた人々と交流を深めました。



三八会 於新宿丸銀 昭和14年(1939)12月18日(未明 後列右から2番目)

第三章 終の棲家―高円寺―

都会の下町を愛し、19歳から約30年もの間、牛込・小石川を中心に転々と住まいを変えてきた未明一家。家を持つきっかけになったのは、まとまった収入があったことでした。大正15年(1926)から始まったいわゆる円本ブームで、未明にも予期せぬ印税が入ってきたのです。昭和5年(1930)、未明は杉並区高円寺に最初の家を構えました。

それから20年あまり、2度の空襲にも焼け残った家で穏やかに暮らしていた未明でしたが、70歳の頃、近所の音楽教室の音が、書齋で原稿を書く未明を悩ませるようになります。そしてとうとう引越を決意し、幸いすぐ近くに見つけた家に移ったのでした。昭和27年(1952)暮れのことです。大正15年(1926)4月に『小川未明選集』全6巻が完結したのを機に、未明は童話に専念することを決意、以後小説の筆を折ります。そして「東京日日新聞」に発表した「今後を童話作家に」で次のように述べました。

「過去の体験と、半生の作家生活において、那辺に多少の天分を存するかを知った私は、更生の喜びと勇気の中に、今後、童話作家として、邁進をつづけようと思っている」

その後は昭和12年(1937)に童話雑誌「お話の木」を主宰するなど、童話ひとすじの道を歩み続け、戦後は日本児童文学者協会初代会長に選出されるなど、児童文学界の重鎮として活動しました。

創作は75歳、昭和32年(1957)頃まで続けられ、その総数は童話だけで約1200編に及びます。

童話作家となり高円寺に移ってからは、児童文学に関わる人たちとの交流が多く

なっていくきます。未明を慕って訪ねてくる後輩作家も多く、よく一緒に新宿に飲みに出かけました。戦後も未明の好んだ居酒屋、新宿「樽平」での会合がたびたび行われています。中でも早稲田大学出身の童話作家とは、生涯親密な繋がりをもち続けることになりました。秋田雨雀・坪田譲治・浜田広介・酒井朝彦のほかにも、吉田甲子太郎・楠山正雄・渋沢青花などと親交がありました。



未明と児童文学者たち 昭和26年(1951)5月8日

未明の部屋 紹介

小川未明文学館10周年記念の一環として平成27年10月にオープンしました。(表紙写真をご覧ください。)小川未明が生前書齋として使用していた部屋を文学館内に新たに再現したものです。未明が生前愛用した品も展示しており、今回はその一部をご紹介します。

未明の机上にて



未明万年筆

万年筆は握りぶとのウオターマン、原稿用紙は神田の文房堂の四百字詰だった。そして、机上にはいつも、そのころあったアテナ・インキの大きなびんが置いてあった。

未明の次女の岡上鈴江さんは『父未明とわたし』（樹心社 昭和57年）で、当時の思い出をこう書き残しています。

机に向かい、原稿用紙のひと枳ひと枳を真剣に文字で埋める未明は、あるときは、暗い北国の人びとの人生を描き、またあるときは、虐げられる弱者にかわり、社会の不公平を怒り、次の時代、社会になう子供たちのために数々の童話を書いてきました。

当館で保存している未明の現存する原稿の多くが万年筆による筆跡のもので、遺品の中にはトンボ鉛筆や真鍮製の鉛筆削りもありますが、見つかった書きかけの原稿用紙にペン書きされたものでした。



真鍮製の鉛筆削りと鉛筆、消しゴム



書きかけの原稿

未明のトレードマーク

未明と言えば坊主頭に眼鏡、万年筆を持つて原稿に向かう姿が印象的です。

実際、現存する未明の写真には坊主頭以外のものはなく、岡上鈴江さんの『父小川未明』（新評論 昭和45年）では、

その髪が少しでも伸びただけで床屋に行つてつるつるに剃ってもらい、風呂に入ったあとで頭に蘭の花のような良い香りのするローションをつけていたことが思い出として書かれています。伸ばさない理由としては、頭が重くなるのが嫌だったからとされています。

未明はいつも和装で過ごし、午前を原稿の執筆にあて、午後は散歩や友人との将棋を指す時間にしていました。

そうして外出する際には和装の上に二重回しのマントやハンチング帽を被ってステッキをつき、好みの新刊書を探しに丸善にいき、まれに魚屋で好物の蟹をふところに入れて帰ってくることもありました。文学館に置かれているハンチング帽もそんな未明の日常と共にあったのではないのでしょうか。



ハンチング帽

未明の遺品

未明の部屋には小川家から寄託され、未明が生前愛用した品々を展示しています。

外出する際に被っていたハンチング帽をはじめ、トレードマークともいえる眼鏡。オリンパス製の懐中時計や原稿を書く際に使われた万年筆や鉛筆などもあります。

当文学館では、このような愛用品もまた、当時の未明を知る手掛かりとして大切に保管しています。



懐中時計



眼鏡

文学館講座

平成27年度の文学館講座は、千葉俊二さん、成實朋子さん、小笠裕二さんを講師に開催しました。ここでは講座内容の一部をご紹介します。

第1回

「憧憬の作家 小川未明」(講座要旨)

11月7日(土) 千葉 俊二さん
(早稲田大学教授)



未明の第一創作集『愁人』に坪内逍遙が序文を書いていきます。「思うに此作家の造詣は果たして如何ばかりに及ぶべきか、今はもとより知りたしと雖も、其の作られたる人にあらずして生まれたる人たることは争ふべからず。多年早稲田学堂に学びたる人には相違なけれど、読書の人にも記誦の人にもあらずして、瞑想の児、憧憬の児たりし此作家は、諸講師の口頭より果して幾ばくの獲る所かあ

りし甚だ覚束なし」と。そこから「憧憬」という言葉を借りてきましたが、今日は、作品集『物言はぬ顔』の中からそこに収録されている未明の代表作の一つといわれている「薔薇と巫女」、および「死」という2つの作品を紹介しながら話を展開したいと思います。「薔薇と巫女」の薔薇はこの陰鬱でなんの刺激もない現実社会に刺激を与える美の象徴、巫女は神秘あるいは現実の世界の不思議の象徴と思われまふ。「巫女は過去、未来、現在のことを言ひ当てる」とされており、数学の方程式におけるXと同じXという町に住んでいるという設定になっております。つまり巫女は、私たちの現実の生というものの統一的原理Xを、明らかにすることができずともしれない、謎めいた神秘的な存在です。その巫女を主人公が探索に出かけることがこの作品の根幹になっています。人生における究極の真実、真理を求めて旅立ったけれども、当然そんなものは求め得られようはずもありません。そして、この現実に戻って来ます。北国の単調な冬の生活にもう一度生きて行かざるを得ない自分自身のおかれている状況、あるいは運命といったようなものを自己確認します。それをこうした一編の美しい象徴的な散文詩のような作品に仕上げたといつて差し支えありません。

「死」は若い時に御殿女中を務めていて、いまだに薄汚れて擦り切れたべなべな絹の着物を着て、プライドだけ高く、ひとり暮らししている老婆が、道端で行き倒れてしまふところから始まります。そうした老婆の姿の中に近代化してゆく時代の変遷の象徴といふものを讀んで見ることができます。もうひとりその老婆の死骸のそばに立っている助教師の物語とがこの作品の中心になっています。助教師は「家には、彼の妻と老婆と3人の子供があつた。彼は、無口で極く好人物であつたけれど、はたらきがなかつたため彼の妻と老婆とは、やはり家にゐて内職をして暮らして助けなければならなかつた」と描かれています。上京した主人公が久しぶりに帰郷してみると、助教師の妻は、この春に死んだと言います。それから三月目にはとうとう、その妻を虐め抜いた因業な老婆の姑も、またこの世を去りました。死ぬのを忘れたような姑にいじめぬかれて死んでいった嫁。憐れきわまりない話ですけど、逆に現在では人間が死ねなくなつた悲劇というものもあるのではないのでしょうか。医療があまりに高度になりすぎて死ねないがゆえにさまざまな悲劇が起こっているのではないかと思われまふ。

今日のようなこういう時代になって未明の作品を讀んでみたら意外と新鮮で、この老人世界の中のどうしようもない行き詰まり的な状況も、この「死」という作品の中には的確に描き出されています。「薔薇と巫女」もこの私たちの生きてゆく人生の本当に根源にある法則とは何か、真理とは何なのかということとを讀者に問いかけてきます。数学の方程式のXを解くようにそのXの値を未明は生涯追いつけたのではないのでしょうか。その軌跡が未明文学になつていないのでしょうか。暗いところばかり思つていた未明の文学ですが、今回、ある一面かなり現代性を帯びているところがあるのではないかと感じさせられました。

第2回

「近代中国における小川未明童話」(講座要旨)

11月21日(土) 成實 朋子さん
(大阪教育大学准教授)



中国における小川未明童話の受容には、おむね2回の波があつたと思います。最初が1920年代から1930年代。2回目が2006年以降現在です。

まず現在の状況から言えば、今日、未明童話は中国で比較的良好に読まれています。これは改革開放政策によって、中国の経済活動が活発になってきたことによります。日本からの翻訳書の出版が急増する中で、児童書も沢山翻訳されるようになり、その中で未明童話も翻訳されるようになったのです。

今日、未明童話が中国で積極的に翻訳出版されるきっかけとなつたのが、2006年に少年児童出版社という大手の出版社から出た

『赤い蠟燭と人魚』です。これは周龍海さんと彭懿さんが共著で訳されたものです。彭懿さんは作家として活躍されていた方なのですが、日本の童話を読んで感銘を受け、東京学芸大学に留学されて、日本児童文学の研究をされました。帰国後すぐにまずは安房直子の童話を翻訳されて、続いて宮沢賢治、小川未明、新美南吉と翻訳されました。彼の翻訳は、そのいずれもが大変に好評を得ています。

今日未明童話が中国で読まれているきっかけは、この彭懿さんによる翻訳紹介だろうと思います。しかしおそらくは、未明のような作風が好まれるという土壌もともと中国にあるでしょう。この『赤い蠟燭と人魚』の装丁などを見てもお分かりかと思いますが、日本の童話であるというのが一見して分かるようになっていて、これも未明童話が現在中国でうけている要因の一つかと思います。

しかし、先に述べた第一のピーク、民国時期においてはどうだったのでしょうか。1920年から1930年というのは、中国の文学史の中でも重要な時期です。かつて私はこの時期の児童文学を知る為に、『小説月報』という中国の文学史の中ですごく重要な雑誌を調べていました。すると、1921年頃に、未明の童話がまとまった形で翻訳紹介されているのに気がきました。他の日本の童話作家の中で、こんなに沢山翻訳紹介されている人なんていません。なぜ未明童話なのか、と思いましたが、また、この時に翻訳紹介されていたのは、あまり有名な作品ではありませんでした。なぜ『赤い蠟燭と人魚』のように有名な作品ではないのだろうか、とも思いました。『小説月報』以外にも、例えば『児童世界』

という日本の『赤い鳥』に相当する当時の子ども向け文芸雑誌にも未明童話は翻訳され、そうして翻訳された未明童話は、やがて単行本の形で出版されました。それが『牧羊兒羊飼いの子ども』（1925年 商務印書館）という短編集です。この童話集には、最初に葉紹鈞という中国童話の創始者と言われている人の作品があり、そして中国の作家の作品が数作載った後に未明の童話が3作品、アンデルセンの童話が3作品載っています。

中表紙にはなんと未明の写真が載っています。その次のページにはアンデルセン。二人だけ破格の扱いです。このことから、小川未明が、西洋のアンデルセンに匹敵する人物として扱われていたということが分かります。西洋のアンデルセンと東洋の小川未明に続いて、自分たちも近代童話の創作をやっているという中国作家の意気込みが伺えます。

この時期未明の童話を翻訳したのは、張曉天という人です。詳細は不明ですが、記載から推測するに、編集者だったのでしょうか。おそらく日本への留学経験があり、何らかのきっかけで未明童話に惚れ込み、未明の童話集を翻訳出版するようになったかと思えます。張曉天は『小説月報』誌で小川未明の童話を数編翻訳紹介して以来、未明の童話を多数翻訳し、1931年には、上海新中国書局より『小川未明童話集』全4冊を出版しました。これほどまとまった形で翻訳出版された童話作家はこの時期他にはおらず、中国の研究書の中でも、この4冊はこの時期最も影響力の高かった翻訳書に数えられています。

民国期になぜこれほどまとまった形で未明童話が翻訳出版されたかと言えば、この時期

の中国作家たちにとって、童話は自分たちが到達すべき近代的な文芸であり、未明童話はその模範であったからでしょう。自分たちがお手本にできるような、近代的なモチーフで描かれた童話、当時の中国ではそういうものが求められていたわけで、そこがポイントだったのだと思います。

この童話集の存在は未明も知っていて、出版に際して未明自身からも中国語版に対する序が寄せられています。なかなか他で目にする機会がないと思いますので、私が翻訳したもので恐縮ですが、ここでご紹介したいと思います。

「張景君の努力により、私の童話集が善良で正義を愛する中国の子どもたち、そして大人たちに読んでもらえることになった。これ私には心からうれしく思う。人々は各々の良心に従って結びつきあい、理解し、愛し合う。ただ愛だけが、愛のみによつて、我々は人のための道を探しあてることができ、世界は平和と幸福を得ることができ。だのに人類の行為というものは、まことに不可解なものだ。確かに社会の仕組みの中に、少なからずの間違いはあるであろうが、何ゆえ今日の如く互いに争いあうのか。そのうえなぜ人類の自己の責任を軽視し、かつ自然と生活の調整の中に真理の存在を求めず、悲劇に盲従せずにはいられないのか。こうした一切は、すべて精神文化を軽視し、物質文明を重視しすぎたためである。例をあげれば、本来人のために発明した機械が、いつのまにか、人を機械に隷属させるような結果になっているということからも分かる。私の童話は、誠を愛する者が心をこめて書いたものである。この訳本が貴

国の読者の中に、同様の純情を発見し、同様の理知を燃やす友人を多く発見するであろうことに、作者として無限の満足を感ずる。」

「人類の行為というものは、本当に不可解なものである。なぜ争い合うのか」というくだりが、今日の日中関係にビタツとききます。

1930年代当時の日中関係も随分緊迫した状況下でした。そのような中で未明童話が翻訳されたということは、非常に感慨深いです。以上見てきたように、未明童話の戦前の受容のされ方は、今日のものとは少し違います。

戦前において、これほど多く未明童話が翻訳紹介されたのは、未明の政治的な態度も選択の一つの理由であつたかと思えます。しかし何より、未明童話が当時の最先端の童話であり、コスモポリタンな魅力を持っていたという点に理由があつたかと思えます。あまり日本的でない、地域が限定されない作品が選ばれ、翻訳されていることから、第2回目の波との違いがうかがえます。

中国の人たちは2回の波の中で未明の作品を読んできました。彼等の未明童話の受け止め方を見ていくことによつて、私たちの未明童話に対する解釈にも新たな可能性が生まれてくることを期待しています。

第3回

「小川未明の詩碑〈雲の如く〉」

12月6日（日） 小笠原裕二さん

（上越教育大学教授）

（本文の内容は、『小川未明文学館 紀要』創刊号（平成28年3月発行）に掲載されていますので、省略いたします。）

小川未明文学賞

小川未明文学賞は、日本児童文学の父といわれる上越市出身の小川未明の文学精神「人間愛と正義感」を次代に継承するため、平成4年に創設されました。子どもたちの心に夢と希望を育むような鮮烈な児童文学作品を募集しています。

平成27年度で24回目を迎え、これまでに延べ10000編を超える作品が国内外から寄せられました。

大賞作品は単行本で刊行され、多くの子どもたちに読まれています。



小川未明文学賞贈呈式

第25回募集要項

◆募集作品

- ①部門（小学校低学年向け）：
400字詰め原稿用紙20枚～30枚
- ②部門（小学校中学年以上向け）：
400字詰め原稿用紙60枚～120枚
- ・いずれも小学生を読者対象とした創作児童文学で未発表の作品。各部門同時応募も可。
- ・ワープロ等の場合はA4サイズで縦書き。400字詰め換算枚数を明記。
- ・表紙に題名、筆名、本名（ふりがな）、年齢、職業、性別、郵便番号、住所、電話番号を明記。
- ・原稿用紙2枚程度のあらずしを表紙の下に綴じる。

◆応募資格

不問

◆応募方法

上越市文化振興課へ郵送または持参

◆締切

平成28年10月31日（月）（消印有効）

◆入選作

・大賞1作（賞金100万円・記念品）

・優秀賞（賞金20万円）

◆発表

平成29年3月（予定）

*詳細は小川未明文学館ホームページをご覧ください。いただくか、左記に問合せください。

応募・問合せ

〒943-0832 新潟県上越市本町3-3-2
上越市文化振興課内
「小川未明文学賞担当」
TEL 025-5266-6903
FAX 025-5266-6904
Email: mimei@city.joetsu.jp

受賞のひとこと

『四年ザシキワラシ組』を小川未明文学賞大賞に選んでいただき、本当にありがとうございます。

小川未明文学賞を目標に書き続けてこられましたことは、私にとって、とても幸せな時間でした。

私の家の本棚には、未明先生の『月とアザラシ』があります。本の裏には5年3組とマジックで書いてあります。小学生の頃からずっと持っているものです。

10歳のころの私が、その繊細で深い物語に心を動かされていたことに、今さらながら驚きます。子どもは大人が考えているよりも、ずっと多くのことを感じ理解しているのだなあと、この本を読むたびに思います。

今回、賞が決まる前の最終選考に作品が残っていることを、上越市のホームページで知りました。私は家にある『月とアザラシ』の本を抱きしめて、「どうか通してください」と未明先生にお願いしました。願いが叶い、大賞に選んでいただき、とても嬉しいです。

『四年ザシキワラシ組』は、おとなしい性格で、なるべく目立つことはしたくないという小学4年生の男の子が、ザシキワラシに励まされて、「いいたいことは言うべきかも」と、変わっていく物語です。

これからも、笑えること、泣けること、恐ろしいこと、色々な題材を見つけ、子どもの生活と小さな不思議を物語に書いていきたいです。

最後になりましたが、選考していただきました先生方、本当にありがとうございます。

小川未明文学賞を長い間作り続けてこられました、小川未明文学賞委員会と上越市の皆様、文学賞を支えてこられた団体の皆様に、心から感謝いたします。

児童文学を書きたいと願う人の、目標になる賞をありがとうございます。



第24回 小川未明文学賞大賞受賞 こうだ ゆうこ

（大賞作品「四年ザシキワラシ組」）

特別展おはなし会 10月18日(日)

小川未明文学館ビックブックシアター

小川未明文学館ができて10周年を記念して特別展が開かれ、合わせて特別展おはなし会を行いました。

- ★山の上の木と雲の話 グループさくら
- ★きつねのおばさん お話の会うさぎ
- ★太陽とかわず シャーフの会
- ★小さな草と太陽 グループ空
- ★二度と通らない旅人 未明童話の会



(グループ空)

「小さな草と太陽」では、キーボードの演奏をバックに、小さな草の生長と心の変化の様子を、自作の絵で表現しました。



(シャーフの会)

太陽から池の主に任命され自分の池が全世界だと思っていたかわず。ある日、ぶよから自分の池がちっぽけでまだまだ広い世界があることを聞きます。さて、あせったかわずはどうしたでしょうか。



(お話の会うさぎ)

子たちときつねのおばさんの駆け引きが楽しいお話です。子たちはどんな知恵できつねのおばさんをまくことでしょうか。

出張おはなし会 ～おもに小学校と児童クラブに行きました～



山部小学校 (未明童話の会)

「月夜と眼鏡」「牛女」の2つの作品を楽しみました。皆さん熱心に聞いてくださり、楽しいおはなし会でした。



上下浜小学校 (グループさくら)

「野ばら」を紹介した後で、「感想を？」との先生の問いかけに、2年生の男子が「戦争をしてはいけないと思った」と。その言葉を聞いて深く感動しました。

出張おはなし会、会員登録の連絡先
上越市文化振興課
 〒943-0832 上越市本町3-3-2
 TEL 025-526-6903
 FAX 025-526-6904
 E-mail: mimei@city.joetsu.lg.jp

のばら

vol.12

発行：未明ボランティアネットワーク
発行日：2016年5月31日

未明ボランティアネットワークだより

平成27年度
の活動

- ・小川未明文学館ビックブックシアターおはなし会…全24回、延べ参加者330名
- ・出張おはなし会（小学校、放課後児童クラブ等）…30ヵ所、1,294名
- ・特別展おはなし会（小川未明文学館ビックブックシアター）
- ・会員の研修会（小川未明ゆかりの詩碑巡り）

文学館でのおはなし会（毎月第2、4日曜に実施）



（シャーフの会）からすねこと べるしゃねこ
黒いからすねこと白いべるしゃねこ。色彩のコントラストとかわいい動きをペープサートを使ってユーモラスに表現しました。



（お話の会うさぎ）水車のした話
水車小屋に大雪で閉じ込められた野ねずみが、一冬水車と交わした会話をかわいく、ある時は切なく水車が語ります。



（グループ空） 真心のとどいた話

貧しくて、村人と米山の薬師さまにお参りに行けない女房が、家で真心をこめて拌み、その心が仏様に届いたというお話です。

今年度は新グループ「シャーフの会」も発足して、5グループで活動しました。本型のスクリーンを使っての映像、パネルシアターや絵を使い、そして音響効果も加えながら、子ども達にも未明の作品により親しみを持ってもらえるよう工夫しています。今回はその中から各グループで作った幾つかの作品を紹介します。

● お知らせ ●

平成28年度 小川未明文学館カレンダー

小川未明関係資料の収集について
協力をお願いします！

小川未明文学館では、未明に関する文学資料の収集に努めています。下記の資料に関する情報をお持ちの方は、ご連絡くださいますようお願いいたします。資料の寄贈については、特定の場合（すでに複数点を所蔵している資料等）を除きお受けしますので、ご不明の点はお問合せください。

【主な収集資料】

1. 特別資料

小川未明原稿、書簡、遺品、その他自筆資料（短冊・書軸等）、写真（オリジナル）、小川未明関係者資料（未明書簡、献本など）

2. 図書

未明作品集（未明生前・没後刊行図書）、全集・選集（未明作品を一部所収した資料も含む）、初出雑誌（未明作品掲載）、未明作品の外国語訳、絵本・紙芝居

3. 参考資料

未明に関する研究論文、エッセイ、記事（雑誌・新聞等）

6～7月 朗読研修会

6月17日(金)・7月1日(金)・7月15日(金)

6～8月 童話創作講座

6月26日(日)・7月31日(日)・8月7日(日)

7～8月 特別展

「小川未明文学賞25周年記念 大賞受賞作品展」
7月30日(土)～8月28日(日)

10～12月 特別展「小川未明 12冊の本展」

10月8日(土)～12月ころ

10月 小川未明文学賞締切 31日(月)

10～12月 文学館講座 (全3回)

3月 小川未明文学賞贈呈式

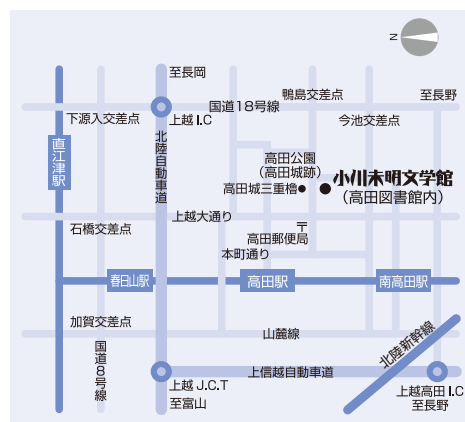
*通年で、所蔵品紹介の小展示を行っています

未明ボランティアネットワークによるおはなし会

*毎月第2・4日曜日午後2時から文学館にて開催

*学校等での出張おはなし会を随時開催

問合せ
〒943-0835
新潟県上越市本城町8-30 (高田図書館内)
TEL 025-523-1083
FAX 025-523-1086
URL [http://www.city.joetsu.niigata.jp/
site/minsei-bungakukan/](http://www.city.joetsu.niigata.jp/site/minsei-bungakukan/)



入館料 無料

休館日

毎週月曜日（この日が休日の場合はその翌日）
休日の翌日・館内整理日・資料整理期間
年末年始（12/29～1/3）

開館時間

火～金曜日 午前10時から午後7時
（6月から9月の間は午後8時まで）
土・日・休日 午前10時から午後6時

小川未明文学館 利用案内